

Title	Poetics of Dislocation : Dylan Thomas as a Marginal Man
Author(s)	仲渡, 一美
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57892">https://hdl.handle.net/11094/57892</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【3】

氏名	仲 渡 一 美
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 23316 号
学位授与年月日	平成21年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	Poetics of Dislocation : Dylan Thomas as a Marginal Man (逸脱の詩学—マージナルマンとしてのディラン・トマス—)
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 森岡 裕一 教授 服部 典之 准教授 片瀨 悦久 准教授 石割 隆喜

## 論文内容の要旨

本論文は、20世紀前半に活躍したイギリス・ウェールズ出身の詩人であるディラン・トマス(1914-53)を取り上げ、詩、短篇小説、抒情詩、エレジー、詩劇などの多種多様な文学ジャンルに挑戦した同詩人の異種混濁的な文学世界の特質を逸脱の詩学という観点から読み解こうとした研究である。論文は、序論、本論6章、結論、および注、参考文献から構成されており、全体で英文にて180ページ、和文400字詰め原稿用紙に

換算して約480枚に相当する論文である。

「序論」において、トマスの文学を、ウェールズ性、アングロ・ウェールズ性、イングランド性、モダニズム性といった観点から検証しようとすると、そのいずれにも限定され得ないテキスト空間の流動性が見られることを指摘し、この規範性・慣習的世界を逸脱し周縁性に固執する特質を具体的な文学作品の分析を通して明らかにするのが本論の目的であると、論者は述べる。

第1章では、後期短篇小説集『仔犬のような若き芸術家の肖像』(1940)を取り上げ、トマスが、モダニズムの小説家ジェームズ・ジョイスの代表作『若き芸術家の肖像』をパロディ化した短篇小説を創作することにより、初期のモダニズム的詩学を脱してリアリズムの叙述へと転換を遂げたのだと論者は述べ、その転換のありようを検証する。

第2章では、トマスの代表的な「場所の詩」である「羊歯の丘」(『死と入り口』[1946]に収録)を取り上げ、アングロ・ウェールズ的要素を指摘しながら、そこに頻出する‘green’という語の多義性を考察することにより、トマスがエコクリティカルな視点を持ち、人間中心的世界の終末を描いていることを明らかにする。

第3章では、後期の代表的な死を描いた詩「あのやさしい夜におとなしく入っていつてはいけない」(『田園の眠りの中で』[1952]に収録)を取り上げ、そのアフォリズム的な詩のスタイルが既成の宗教からの脱中心化を図り、トマス独自の宗教観・生死観へと読者を誘い込む誘惑のレトリックとして機能していることを分析・考察する。

第4章では、初期短篇小説の中から少年の成長を描いたいくつかの物語作品を取り上げたたとえばその代表作「海の眺望」に窺えるように、西洋の近代的知や父なるイングランドの<象徴界>という父性的権威に対して、<想像界>という異界に住む少年が揺さぶりをかけるありようを説き明かし、ここにウェールズ的/イングランド的アイデンティティの揺らぎの問題を問うモチーフの存在を指摘する。

第5章では、詩劇『ミルクの森で』(1953)を取り上げ、その喜劇性の源泉を探るために、権威的なものが道化と種々の過剰性によりずらされ、虚飾がはぎとられることによって、狂気じみた登場人物のもつ深い豊かな経験を前景化する叙述を解明する。

第6章では、女性を謳ったトマスの代表的詩「白い巨人の股の中で」(『田園の眠りの中で』に収録)を取り上げ、歴史や社会から疎外された女性が住むフォークロア的世界の設定の中に、硬直したセクシュアリティや道徳を逸脱したダイナミズムが宿っている面を探り、不毛であるがゆえに逆説的に豊穡性と官能性を湛えることとなるトマスの女性表象の特質を明らかにする。

「結論」では、ディラン・トマスの文学テキストが孕んでいるハイブリッド性は今日の現代批評的枠組み中で捉え直すことのできる特質であると主張し、トマスの逸脱の詩学を再評価すべきであると結論づける。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス・ウェールズ出身の20世紀・現代詩人ディラン・トマスを対象にして、その代表的な詩作品、短篇小説、詩劇などを取り上げ、トマスの異種混濁的な文学世界の特質を主にホミ・バーバに代表される現代批評観にもとづいて再評価しようとした

野心的な研究である。トマス文学への新しい角度からの研究の道を拓いた業績として高く評価できよう。私生活においてさまざまな逸話を残している詩人について、その人生面への興味を極力抑え、もっぱら文学作品それ自体に分析的関心の目を注ぎ、考察の主力を傾けて実行した本研究は、トマスの捉え難く評価の困難な文学的世界の全体像を鮮やかに描き出すことに成功した。また、特に「羊齒の丘」や「あのやさしい夜におとなしく入って行ってはいけない」などの詩作品がもっているテクスチャーの分析を通して浮かび上がるトマスの詩的風景の描出には、論者自身の資質が大きく関わっており、論者のトマス作品への深い愛着と読み込みを抜きにしては成立し得ないものが感じられ、この特質が本論文を好感もてる研究に仕上げるのに寄与している。

ただし、本論文において問題がないわけではない。ホミ・バーバ、バフチン、サイードらの理論を援用するに当たり、その把握が必ずしも正確と思えない場合が何度か見られ、より厳密な理解が求められよう。また、文学テキストそれぞれについての分析と論全体を支える表題「逸脱の詩学」との関わりが多少不鮮明になることがあり、一層堅固な総論の確立に向けての考察が求められよう。ときに議論が拡散するきらいがあるのも惜しまれる。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。